

国際経済科サマーキャンプの実施について

神奈川県立商工高等学校教諭 川田 純子

I はじめに

この国際経済科サマーキャンプは、神奈川県立商業高校（相原高校、厚木商業高校、小田原城東高校、商工高校、平塚商業高校）の国際経済科の教員を中心に取り組んできたものである。

II 国際経済科サマーキャンプ実施の経緯

神奈川県で実施している国際経済科サマーキャンプは、神奈川の五つの県立商業高等学校の合同開催で、国際経済科の生徒を対象としている。

神奈川県には市立、私立を除くと五つの県立の商業高等学校があり、1992年、5校同時に国際経済科が新設された。設置の目標として、国際社会で活躍できる人材の育成ということを掲げ、語学教育だけでなく、異文化理解にも力を入れて豊かな国際感覚の育成にも努めてきた。神奈川県立商業高等学校教育研究会の国際経済専門部会では、この国際経済科の魅力・特色づくりについて1年に数回の会議を持ち、検討を重ねてきた。国際経済科に入学してきた生徒に対する学習への動機づけと国際経済科に入ってきた、楽しいという思いを持ってもらいたいという願いから、魅力ある行事の検討が始まったのである。その中で、国際経済科の独自の行事として、県立5校合同での『国際経済科サマーキャンプ』を計画し、実施してきた。

今年の8月に6回目のキャンプを実施した。

III 国際経済科サマーキャンプの計画にあたって

国際経済科サマーキャンプの計画にあたっては、計画当初から、初めての企画ということや、企画するスタッフの人数や参加者の募集などの問題から、1校の単独開催ということではなく、五つの商業高校合同での企画運営ということで始まった。

まず、同じような英語キャンプを実践している学校から資料をいただいた。1校単独で開催している学校との違いはあったものの、活動の内容や宿泊を伴う英語キャンプの注意事項などをお聞きすること

ができ、大変参考になった。

参加者の募集は各校からの希望者ということにしていたが、どのくらい集まるかはまったく予測がつかず、とりあえず各校平均10名で合計50名の参加を予定した。生徒の経済的負担を考えてなるべく参加費を抑えたいと考え、使用する施設は公立の施設とし選定を慎重に行った。

1 国際経済科サマーキャンプの目的

教員側の目的としては、

- ・「国際経済科」の特色づくり
- ・生徒の英語学習への動機づけ
- ・異文化理解

ということを掲げ、キャンプの企画にあたった。

参加する生徒には、

- ・英語に触れよう
- ・英語でコミュニケーションしてみよう
- ・いろいろな国の文化に触れよう

という目的を提示している。特に生徒の中には、“英語は好きだけど話せないから行けない”と言って参加をためらう場合もあるので、英語を話せなくても、単語を並べたりジェスチャーを使いながらコミュニケーションをする楽しさを知ってもらいたいと考えている。

2 参加者

参加者は、神奈川県立の商業高校の国際経済科の生徒約50名と、日本への留学生やアメリカンスクールの生徒約10～15名である。

日本人高校生の場合は、各校の国際経済科の1年生を主な対象として募集している。キャンプを始めた当時は、とにかく1年生中心ということにしていたが、キャンプの雰囲気や楽しさを知っているリピーターの2、3年生が参加することによって、キャンプの立ち上がりがよくなり、グループを引っ張って盛り上げてくれるので、活動がスムーズになることから、2、3年生の参加も歓迎している。実際に最近では、2回目、3回目の参加者が増えている。

外国人高校生の場合、キャンプ開始当時はアメリカンスクールの生徒に参加してもらおうよう要請して

いたが、アメリカンスクールの生徒は、こちらのキャンプの開催日程によっては日本にいないこともあって、参加を依頼することが難しくなってきた。

そこで、日本への留学生の窓口となっている団体に声をかけて、留学生に参加してもらうようにした。現在は、3つの団体とのつながりがあり、毎年各団体から、3名から多い時で10名くらいの参加者がある。1年間の留学プログラムで来日している学生は、少し日本語が分かるようになってきているので、日本人の生徒には安心感があるようである。また、留学生にとっても、日本人の生徒と2泊3日を過ごし日本語の勉強ができることと、同じような立場の留学生と会って、思いっきり英語を話したり、互いに励ましあったりできるよい機会となるようである。

3 講師

講師については、われわれ商業科の教員が担当することは非常に難しいし、できれば外国人を講師に迎えたいという希望があった。当初各学校のALTとその関係者に頼むという案もあったのだが、ALT間の連絡が難しいことから断念した。

そこで、内地留学の制度で学芸大学で英語教育を学んだ教員がいたので、そのときの英語教育の教授に相談したところ、大学院のゼミの学生を紹介していただいた。英語教育を専攻し、将来は英語の教員になりたいという希望をもって、大学で英語キャンプを行ったことのある大学院生と学芸大学への留学生に依頼することになった。

大学院生にとっては、実践の場として活用していただいている。われわれ教員は、裏方に徹してキャンプの進行を中心に行う。

また、6月末に留学先のアメリカから帰国して卒業式を終えたばかりの卒業生に、アシスタントとして参加してもらったり、大学の英文科へ進学した卒業生がアシスタントとして参加してくれている。

4 活動内容

主な活動は、グループごとの活動で、英語でコミュニケーションをとりながら、何かを学んだり、作り上げることを通して、相互理解を深めることを目標としている。

各グループは、2～3名の外国人と5～6名の日本人高校生で構成されている。

各回の主な活動内容は次のとおりである。

第1回「留学生の国を知ろう」…講師の留学生の国の文化・宗教・民族・歴史などを講師のプレゼン

テーションと質疑によって学んだ。

第2回「ビデオレター制作」…サマーキャンプの思い出をビデオレターとして、グループごとに制作した。

第3回「ニュース制作」…英字新聞を読み、ニュース番組を制作した。

第4回「CM制作」…同じグループの留学生の母国の紹介CMを制作し、その国の文化に触れる。

第5回「日本のことわざを表現しよう」…日本のことわざを留学生の母国語では何というかを調べ、各グループでそのことわざをスキットや絵で表現し、どんなことわざかをみんなに考えてもらう。

その他の活動としては、互いの交流を深め、理解しあうためのさまざまな活動を取り入れている。

・オリエンテーション

自己紹介をかねたゲームやキャンプのテーマソングの紹介などをし、キャンプの導入とする。

・アルバムトーキング

各自が持ち寄った写真を見せあいながら、自己紹介をかねてお互いの理解を深める。

・プレゼンテーション

ビデオ作製や、スキットなどの活動の成果をグループごとに発表し、表彰式をおこなう。

・ショートスピーチ

キャンプの感想を英語でスピーチをする。

・ディスカッション

“なぜ外国語や外国の文化を学ぶのか”などのテーマでグループごとにディスカッションを行う。

・オリエンテーリング

ゲームをしたりクイズに答えながら、グループごとにコミュニケーションをとる。

・ソフトバレーボール大会、バンブーダンスなど

バンブーダンスはフィリピンからの留学生に教わり、体を動かしながら異文化に触れる活動を入れている。

5 生徒の感想から

キャンプの終わりに生徒に書いてもらった感想の中から、よかった点として、

- ・外国人と接することができた
- ・友達がいっぱいできた
- ・おしゃべりができてよかった
- ・留学生がみんないい人
- ・場所がよかった
- ・今年は留学生が多かった

などがあげられる。

感想文を読むと、英会話が上達したいとか外国人と接したいなどの積極的な理由ではなく、友達が行くからなどの消極的な理由で参加している生徒もあり、“最初はどう帰りたいと思った”とか“何をしているのかわからなかった”という気持ちもあったようだが、プログラムが進むにしたがって慣れてきて、最後には“来てよかった”とか“また来たい”、“帰りたいくない”などの感想を述べている。

この短い3日間の間に、コミュニケーションの難しさや楽しさだけではなく、言葉の通じない相手とどのようにしてコミュニケーションをとるのかを体験を通して学んでいるようである。ジェスチャーをしたり、辞書を使って単語を並べたりしながらでも、何とかお互いに言いたいことを理解し合えることを体験できたと思う。

また、異なるバックグラウンドをもつ外国人の留学生との交流を通して彼らの文化を知り、自分たちがいかに日本のことや日本の文化について知らなかったかがわかったということを感じ文に書いている生徒もいた。そして、同じ高校生なのに、いろいろな問題に対してきちんと自分の意見を持っている外国人の高校生を見ることは、日本人の高校生にとってはよい刺激になっているようである。

6 今後の課題

① 講師の継続的な確保

今のところは、学芸大学大学院の学生が継続して引き受けてくれている。なるべく翌年はリーダーとしてキャンプをまとめられる人材を探してもらい、継続できるようお願いしている。

② 外国人留学生のグループリーダーとしての活用

はじめは、生活面の指導や活動への参加の指導が難しかったので、はじめに講師と外国人留学生とのミーティングの時間を取り、活動の概要を説明し、グループリーダーとして活動を引っ張っていくことが望まれていることを話すようにした。ミーティングをはじめから、非常に順調になった。

③ 施設の確保

抽選になってしまうため仕方がないが、講師の都合と施設の空き状況の一番合う日程で施設をおさえられるようにしている。昨年は結果的にはほかの団体がいなかったため貸切となり、自由に施設を使うことができた。

④ 参加者の学習意欲をいかに日頃の学習につなげ

るか

各学校、各教員の努力に頼ることになるが、英検やスピーチコンテストへの参加を勧めて、継続的に英語を学習する機会をつくるようにしている。

⑤ キャンプ中の生活指導

外国人留学生に対して、きちんとキャンプ中の生活ルールを説明することと、日本人の生徒にも事あるごとに注意をするしかない。キャンプの参加者がほとんど女子であるのに対し、女性の教員は多いときで2～3名なので、各学校ごとに指導することを中心としている。健康面については学校を問わず、女性の教員があたっているが、女性の教員が少ない。

IV 終わりに

このサマーキャンプは、参加した生徒にとっては、国際理解の第一歩としてのよい機会となっていると思う。サマーキャンプの卒業生が、進学してさらに英語や異文化について学んだり、海外へ留学したり、アシスタントとしてキャンプのお手伝いに来てくれることによって、彼らのうちにこのキャンプの成果を見ることができるのは非常にうれしいことである。

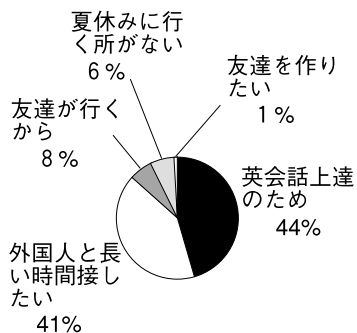
今後、これまでに取り組んできたことをどのように継続し、さらに成果をあげていくかが課題であると考えている。国際経済科で学ぶ3年間で、生徒一人一人が日本のことをもっと知り、さらに海外のことに目を向けるよう国際理解教育を継続し、国際社会に送り出すことができるように、努力していきたいと思う。

参考資料（次頁参照）

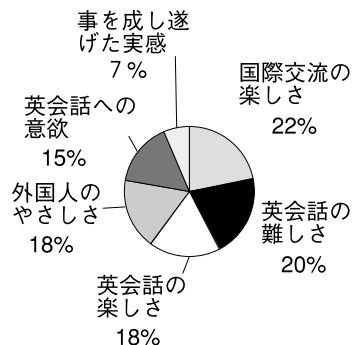
アンケート集計結果

2000年サマーキャンプのしおりより（活動計画）

サマーキャンプ参加の動機（複数回答）



サマーキャンプで体感したこと



参考資料：2000年サマーキャンプのしおりより（活動計画）

＊ 活動計画

時間	8月16日（水）	8月17日（木）	8月18日（金）
7:00		起床	起床
8:00	本厚木駅 バスセンター集合 (8:40)	朝食（食堂）	朝食（食堂）
9:00		写真撮影	清掃・片付け、荷物移動
9:30	会場到着(10:00)	レクリエーション ソフトボール (プレイホール)	※ 荷物を持って、 集會室Bに集合する。
10:00	入所式・お江戸・お		※グループ活動 ・ディスカッション、発表 (集會室Bほか)
10:30	自己紹介、ゲームと歌		
11:00	グループ分け (集會室B)		
11:30		昼食（野外） (おにぎり弁当)	昼食（食堂） (ガッツィ)
12:00	昼食（食堂） (カレーライス)		
12:30			アンケート記入
1:00	ミーティング（外国人）	* 集會室Bに集合。	退所式 (集會室B)
2:00	『異文化理解』 (集會室B)	全体で説明を受けた 後、グループごと施設内 をリサーチしながら、 夜の発表（Task）の準備 をする。 * 終了後、集會室Bに再 度集合する。	会場出発(2:00) バス乗車（2:30）
6:00			
6:30	夕食（食堂） (とんかつ)	夕食（食堂） (焼肉)	
8:00	入浴（浴室）	入浴（浴室）	
9:30	ナイトミーティング (集會室B)	発表会 授賞式 (集會室B)	
10:00	就寝準備	就寝準備	
	就寝（宿泊室）	就寝（宿泊室）	